

「身近な地域」の学習のポイント

日本女子大学助教授 田部 俊 充

1 はじめに

4月から新学習指導要領が実施され、学校現場は対応に追われていることであろう。本稿で取り上げる「身近な地域」の学習は、教科書では第2部「さまざまな地域の調査」1章「身近な地域を調べよう」に該当する。第2部では、地域的特色をとらえる視点や方法が、地域の規模によって異なることを、身近な地域・都道府県・国という三つの規模の異なる地域を取り上げて、実際に調査活動を行いながら学ぶことをねらいとしている。本稿の前半では、「身近な地域」の学習の目的・内容、意義、留意点をあげたい。後半では、この学習のポイントとして、①生徒の生活の中から地理的事象をさがす、②小学校での学習経験に配慮する、③表現活動を工夫する、の3点を中心に触れていく。

2 「身近な地域」の学習の目的・内容

学習指導要領の大項目(2)「地域の規模に応じた調査」は、ア 身近な地域、イ 都道府県、ウ世界の国々、の順に学習が構成されている。地域が広く体験的学習が組みづらく、統計や諸資料を活用した理解が中心の「都道府県」の学習、新聞やテレビ、インターネットといったメディアを通した方法でアプローチするのが中心の「世界の国々」の学習に対して、「身近な地域」の学習は、生徒自身の直接経験が主体となる学習である。身近な地域における諸事象を取り上げ、観察や調査などの活動を行う。そのために、生徒が生活している土地に対する理解と関心を深めさせる。また、市町村規模の地域的特色をとらえる視点や方法、地理的なまとめ方や発表の方法の基礎を身につけさせることを目的としている。

「身近な地域」の学習の内容に関しては、あまり新しいものは示されていないが、学習を通して育成する能力・目標を示した(4)にその改訂のエッセンスを読み取ることができる。

4) 地域調査など具体的な活動を通して地理的事象に対する関心を高め、様々な資料を適切に選択、活用して地理的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに適切に表現する能力や態度を育てる。

学習指導要領 目標(4)

平成10年版学習指導要領で変化したのは、末尾の「適切に表現する能力や態度を育てる」という点である。このことについては後述する。

3 「身近な地域」の学習の意義

従来の知識の詰め込み中心の地理学習は、地名や産物を暗記することに終始しがちである、と長い間批判が繰り返された。そして、変化の激しい時代の今、社会の変化をとらえる座標軸となる知識とともに、地理的事象の認識の方法である地理的な学び方・調べ方を身につけることが求められている。地域の実際の景観や写真資料、地図、統計資料から地域的特色を把握し、その要因・背景を分析・考察することが、地理的な学び方・調べ方である。

もちろん地理学習に必要な地名や地理的用語は数多くあり、それら基礎的な地理的知識の習得とのバランスを忘れてはならない。

内容の取り扱いでは、学校所在地の事情を踏まえて観察や調査を指導計画に位置づけ、実施することに留意する必要がある。また、その際、縮尺の大きな地図や統計その他の資料に親しませ、それらの活用の技能を高めるようにすることも忘れてはならない。

学習対象としての「身近な地域」は、学区域をもとに、生徒の日常の生活圏や行動圏を考慮して適切に設定する。その際、地域の資料の事前収集、地域の協力を得るなどの事前の準備が必要である。

また、個人差への対応にも配慮する必要がある。「○○を調べなさい」といったあいまいな指示だ

けでは、右往左往してしまう生徒が出てしまう。実際に調査活動に行くと、読図能力、聞き取りの能力、結果を適切にまとめるなど総合的な力が要求され、個人差が生じる。

これを解消する一つの手立てはグループ活動で取り組ませて互いにカバーさせることである。そして、グループ内で役割を明確にし、何をすればいいかわからない生徒を作らない配慮が必要である。また、グループ同士で相談するときには、机間巡視を行い教科書の例などを参考にさせるとよい。聞き取り調査の初期の段階では、生徒の実態に合わせて、教科書をモデルにして野外調査のオリエンテーションを行い、「何に目をつければいいのか」を具体的に示す必要がある。

生徒の自主性に依存し過ぎて、教師側で何も準備せずに地域に放任するのではなく、学習活動を予想し、そのプロセスを生徒がスムーズに踏めるようにしたい。そのためには、教科書の事例のようなワークシートを教師側で作成してもよい（資料1、2）。

まとめ方や発表の方法については、地域調査の資料1 聞き取り調査のマナーと質問事項の例

<p>○聞き取り調査</p> <p>調査する農家… さん</p> <p>調査する日時… 月 日</p> <p>○マナー</p> <ul style="list-style-type: none"> ・質問をしたい人に、あらかじめ連絡をとって、訪問の日時を伝えておく。 ・あいさつはしっかりする。 ・質問するときは、ことばづかいに気をつける。 ・お世話になった人にはきちんとお礼を伝える。 	<p>○質問事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ・畑の木は何ですか。 ・どんな種類の作物をつくっていますか。 ・その作物をつくるのには、このあたりの気候や土と関係があるのですか。 ・時期によって、栽培する作物にはどんなちがひがありますか。 ・1年間の仕事の内容を教えてください。 ・苦勞していることや、くふうしている点はなんですか。 ・むかしと比べて、どのような点が変わりましたか。
---	--

帝国書院『中学生の地理（最新版）』P50

資料3 おもな資料と入手先

調査する項目	入手できる資料の例	資料からわかること
地域のようなすをおおまかにとらえるとき	さまざまな地図（5万分の1・2万5千分の1地形図、住宅地図、都市計画図など）、空中写真、市勢（町勢・村勢）要覧、市町村のホームページなど	位置、自然、土地利用など 市町村の人口・面積・産業など 基本的な事項
産業について調べるとき	市町村役場の関連部署の資料、農業協同組合・商工会議所の資料など	生産品目、生産量、生産額、労働者数、出荷先など
歴史について調べるとき	郷土史誌、新聞の縮刷版、郷土資料館や博物館の資料など	祭り、地名の由来、史跡、伝統産業、郷土に貢献した人物など
観光や交通について調べるとき	市町村役場の関連部署の資料、旅行パンフレット、観光協会の資料、紀行文、時刻表など	観光地、観光客数、交通網、輸送量など

帝国書院『中学生の地理（最新版）』P54

結果を地域的特色と関連づけ、地図化するなどしてまとめ、発表する。その際、調査の結果だけでなく、調査の過程を重視する観点から、地理的事象を見出し、課題を発見して追究する過程が明確にわかるようなまとめ方や表現方法を工夫させる必要がある。

5 「身近な地域」の学習ポイント

(1) 生徒の生活の中から地理的事象をさがす
時間もかぎられており、表現能力の育成も重視することも考えると、調査地の下見など教師側の綿密な準備は欠かせない。そして、教師自身がぜひ地図を片手に学区内を歩いて「こんなところに市場があった」とか「○○の地名の由来は○○だった」という発見をして、生徒に伝えてほしい。地区の伝説の話などは身を乗り出して聞くに違いない。

学習を効率的に進めるには、市町村規模の地域的特色をとらえる視点をはっきりともたせるための方策が必要である。そのためには、教科書の事例のように、調査項目例を参考にさせるとよい（資料3）。

資料2 フィールドノートの例

<p>ルートマップとは</p> <p>学校名 _____</p> <p>学年 組 _____</p> <p>氏名 _____</p>	<p>年 月 日</p> <p>○テーマ 学校のまわりには畑が多いので、農業について調べてみよう。</p> <p>○持ち物 ・2万5千分の1 地形図 ・えんぴつ、ボールペン ・方位磁針 ・カメラ ・テーブルコーダー ・巻き尺</p> <p>○気をつけること ・立入禁止のところや、危険な場所 所近づかない。 ・自動車に注意する。 ・仕事のじゃまはしない。</p>
--	---

帝国書院『中学生の地理（最新版）』P48

従前はこの地域調査活動は、さまざまな理由であまり実施されていなかった。実施されなかった理由は、時間数が足りない、教科担任制のため授業時間割が組みにくい、安全管理がむずかしい、フィールドワークのさせ方のノウハウが蓄積されていない、などの点があげられていた。そして、読図指導に終始し、夏休みの課題として生徒の自主性に任せるケースもみられた。

今回の学習指導要領の改訂では、社会科の時間数も削減されたが、「総合的な学習の時間」という調査活動をする場合にまとまった時間を確保しやすい環境も整った。そのために社会科教師は、「総合的な学習の時間」の指導計画作成に積極的にかかわり、社会科との有機的な関連を図ってほしい。

(2) 小学校の学習経験に配慮する

第2のポイントは、小学校の学習成果を踏まえるとともに、生徒の発達段階を考慮して、新しい視点から地域的特色を追究するという点である。

小学校社会科では、体験的活動が重視される中で、地域調査の実施率がかなりの割合にのぼっている。とりわけ、中学年の地域学習では、各単元との関連で、地域の農家、工場、商店街、公民館、浄水場、クリーンセンター、警察署、消防署、用水路などでの活動が重点的に行われている。高学年でも幅広く、工場、放送局、地域の遺跡、博物館などを訪問している。

地域の小学校の指導計画を入手し、重複しないようにするのか、重複する場合、中学校ではどんな視点で調べさせるかを考えることは欠かせない。

(3) 表現活動の工夫

第3のポイントは、表現活動に関する学習経験を知ることからはじまる。社会科だけでなく、他の教科においても、発表活動の有無やその学習形態を知ることが第一歩である。

ポスターセッションという学習形態がある。この形態を他の教科や小学校で熱心に指導している場合、これを参考にして表現活動を工夫すると効果的である。

ポスターセッションは、グループごとにコーナーを作り、共同で調べた調査結果を模造紙などにまとめて、壁面にポスターのように掲示してコーナーを作って発表する学習形態である。そして、授業時間を半分に分け、説明役と発表を聞く役割を交代する。そうすると、生徒は両方の役割を経験できる。

この方式は最近小学校でかなり普及した。その理由は、この発表形式は習得しやすい点、発表者と聞き役が近くて、さまざまなやり取りを交わすことのできる点にある。授業が活性化されるのである。調査の過程で収集した写真を見せたり、聞き取りしたテープを流したり、さまざまな可能性が広がる。ただし、隣のグループと近接していると騒がしくて落ち着いて発表ができないので、会場は体育館のような広い場所か、空き教室がよい。文化祭行事などで多くの人の前で発表する機会を設定するのも方法である。

中学校社会科においては今までも多くの優れた地域の調査活動がなされてきたが、時間の制約などでたいへんな苦労があった。今回の改訂で、時間確保が多少容易になったと聞く。地域について調べ、考え、まとめて、発表する、という活動が全国の中学校で活発に行われることを期待する。

